テレビドラマ代表作選集

九八二年版

テレビドラマ代表作選集　1982年版

1982年8月15日第1刷発行©

編　者　協同組合 日本放送作家組合

発行人　大　林　清

発行所　協同組合 日本放送作家組合

〒106　東京都港区六本木6-2-5　ハラビル1F

電　話 03 (404) 6 7 6 1

発売元　協同組合 日本放送作家組合

〒106　東京都港区六本木6-2-5　ハラビル1F

電　話 03 (404) 6 7 6 1

1074－0000－6301

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

テレビドラマ代表作選集

1982年版

選考委員
伊馬　春部
内村　直也
大林　　清
高橋　玄洋
松山　善三

編集委員
川崎　泰民
田島　義雄
田村多津夫
寺島アキ子

日本放送作家組合

まえがき

昨年末中国を訪問し、北京、上海、杭州、広州の各地で、放送局の人たちと懇談して来た。

テレビドラマについていえば、VTRが用いられているというような機材の発達を除いて、大体日本の草創期に近い感じを受けた。その中でも一番おくれているのは、専業作家のいないことである。つまり放送作家は存在しないのである。

小説の場合は一種のコンテストのようなことがあって、それで職業作家として資格を得ると、仕事をしてもしなくても、国から生活の保証を受けるようになるらしいが、テレビやラジオはまだそこまで行っていない。

ドラマの脚本はおおむね放送局員であるプローデューサーやディレクターが書くか、小説が原作であるならば、その原作者が脚色するように聞いた。

日本ではラジオ時代、既に放送作家の地位が或る程度確立されていたから、テレビがはじまってからも、ドラマはドラマ作家に依嘱するのが当り前のことで、放送局員が片手間にドラマを書くというようなことはまずなかった。

中国のテレビドラマが今後水準を上げて行くためには、作家の育成とその社会的地位の保証が大事なのだが、今回放送関係者と話し合った限りでは、一度も先方からそういう意見は聞かれなかった。

日本の放送関係者は誰もが口を揃えて、脚本がよくなければ絶対いい作品は出来ないという。現実ではそれほど放送作家が尊重されているかどうか疑問だが、それが正論であることは疑う余地がない。

私は帰国してから、日本のテレビドラマの水準を知ってもらうために、『テレビドラマ代表作選集』の芸術祭版を、北京の中央電視台宛寄贈しておいた。中国のテレビドラマ向上のために役立ってもらいたいと念じている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この代表作選集を発刊しはじめたはじめ、放送作家にとって何よりの痛恨事は、その作品がいかに心血を注いだものであっても、オンエアーされたあと雲散霧消して形を止めないことだと、私は序文に書いた。元来戯曲にしても映画のシナリオにしても、活字にしては売れないというのが通り相場だった。ましてあまり前例のないテレビドラマ脚本集を出版しても、営利につながるなど思いもよらなかった。ただ放送作家組合として一種使命感のようなものがあって、多少のリスクは覚悟の上ではじめた出版だった。そしてこの八二年までどうやら続いて来た。

ところで最近になると、事情は少しばかり変りはじめた。一部人気作家の作品に限られてはいるが、テレビドラマの脚本が一般の出版社から刊行されはじめ、その売行きも悪くないということである。出版界の眼がテレビドラマに向けられはじめたといってもいい感触を、私は現実に業界の人から得る機会があった。勿論ベストセラーを期待出来る出版分野ではないが、それにしても活字として、よきテレビドラマ作品が読まれ、形を残すことは、放送作家にとって歓迎すべきことにちがいない。

そしてその先鞭をつけたいささかの栄誉を、この代表作選集の刊行と継続は誇りにしてもよさそうである。

協同組合　日本放送作家組合

理事長　大　林　　清

目次

まえがき　大林　清　3
川の流れはバイオリンの音　佐々木昭一郎　7
北の国から　倉本　聰　43
きりぎりす　山田　信夫　71
隣りの女　向田　邦子　111
タクシー・サンバ　山田　太一　167
山を走る女　砂田　量爾　211
あとがき　265

□作者の言葉

企画してから12年たった。川・人の出会い・音、この三つの主題を見出すのに10年かかった。この作品が芸術祭でグランプリを得て同時に海外へと広がり、チェコから合作を依頼され現在に至った。チェコの合作依頼は同じサイクルで同じヒロインで、ということだ。制作は一九八三年の五月に行う予定だ。その前にスペインでの撮影が待っている。主人公の設定と三つの主題を見出すまで10年も苦しんだから、第二作、第三作が生まれるのが夢のようだ。第四作はニューヨークを撮る予定だ。今年の四月、INPUT(世界テレビ会議)の帰途ニューヨークを歩き、すばらしい人物に出会うことが出来た。ニューヨーク篇は川口幹夫氏の企画だ。世界に〝川〟がある限り創りつづけたいと決意している。世界の人々が待っている、と私は知ったからだ。〝川〟といっても物理的に川だけを撮るつもりは毛頭ない。重要なのは、人の出会いだ。各国の人々から主人公をピアノ調律師に設定してEIKOと名付けたことが革命的に新しい、絶対の価値があると賞讃されている。私もそう信じている。

□略　歴

一九三六年東京生。立教大学経済学部卒。一九六〇年NHK入社。一九六三年ラジオドラマ「都会の二つの顔」で認められる。一九六六年、テレビに転じ現在に至る。

〈スタッフ〉

制作　勅使河原平八
演出　佐々木昭一郎
音響効果　織田晁之祐

〈キャスト〉

A子　中尾　幸世
ルイジ　ロレンツオ・チゴーリ
アントニオ　グイド・G・カターニ
ルーカ　ジャン・ローディ
マリオ　ジョヴァンニ・ザニボーニ
妻　ピエラ・カステラーニ
船頭　パオリーノ
ポー川の人々、ドナウの人々
ジプシーの人々、クレモナの人々、ロンバルディの人々他

制作　日本放送協会

芸術祭大賞

川の流れは バイオリンの音

——ポー川——

作　佐々木昭一郎

放送　昭和56年10月11日

1

プロローグ

主人公のA子がピアノの前に佇んでいる。
A子はいま、グランドピアノの調律をおわって、ピアノのふたを閉じたところである。
A子はピアノ調律師である。
A子はふたを閉じると、黒く光るピアノに手を触れる。
A子の夢の中の声が、遠くからきこえてくる。
Aからはじまって Z につづく世界の川の名。「アムール川、アツダ川……ミシシッピー、ライン、ドン、ハドソン、ナイル、ロワール、セーヌ、テイムズ……」
M　A子が歌うヴィヴァルディー「冬」の〝暖炉の火〟の音節がきこえてくる。
ピアノの上のバイオリン。バイオリンはひび割れている。ひびに触れるA子の指先。A子の指先がバイオリンのfの字に触れる。
バイオリンの二つのf字穴。
バイオリンのfはfiume（川）
A子は、はっきりとつぶやく。
A子「行ってくるよ……川を見に」
妹の写真。十歳位のおさげ髪の少女がにっこりと笑って静止している。
妹へのてがみ。
A子「アルプスを下った。小さな川に沿って歩いた。大きな川に出た。――ポー川。
ポー川から、妹へのハガキ。
バイオリンのふるさと、クレモナに近づいたよ。こわしたバイオリンは大切に持っているよ。川の日記をつけているよ。
元気で。A子」

2

ポー川

ポー川の水面。水面は光っている。
光の中から、A子が歩いてくる。リュックを背負って、右手にバイオリンを携げて。
ピアノ調律師はどこへでもゆく。
A子のゆくところは、世界のどこでもよい。
東京の路地裏を。ニューヨークの大通りを。パリの裏町を。
ピアノ調律師は「歩く」のが仕事だ。
A子は今、歩いている。クレモナの町に向って。
M　テーマ音楽がはっきり聴こえてくる。
ヴィヴァルディー「冬」の〝暖炉の火〟。
ポー川の標識「IL・FIUME・PO」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3

タイトル

白い文字で、「川」。

オーバーラップ。「川の流れはバイオリンの音」

出演者の名前。

ポー川の人々。ロンバルディアの人々。ドナウの人々。

M　テーマ音楽が遠のく。

SE　ポプラの葉のすれ合う音。ポー川の風。遠いクレモナの町の音。ポー川のひびき。

4

塩通り

A子は、歩く。A子はゴム底の茶色い靴をはいている。ジーンズ。ジャンパー。水色のリュック。リュックの中には、ピアノ調律道具と、絵具と、「川の絵日記」が入っている。右手には黒いバイオリンケース。

ポー川からまっすぐにのびている道。「VIA・DEL・SALE」と書かれた標識。A子は標識を見上げる。青い空と木々の緑。A子は、バイオリンケースで標識を指差して、読みあげる。

A子「ヴィア・デル・サーレ」

A子、辞書をひく。

A子「SALE……SALT、塩。塩の道だ」

A子は、標識の下の大きな石の上に立つ。どの標識もポー川を差している。

A子「どっちかな?……こっちかな……あっちかな……バイオリンのふるさとクレモナ」

A子は、歩く。

ポー川のうず巻き。A子は立ちどまる。ポー川はA子の心の中でうず巻きをつくっている。光るポー川のうず巻き。うず巻きはfの字の集合体。fの字はバイオリンの心。fはfiume(川)のf。

SE　遠い鐘の音。カンパーナ。

5

鐘の訪れ

塩通りを歩くA子。白い犬を連れた老人が土手の上に立っている。A子は片言のイタリア語で老人に道をたずねる。

A子「ボン・ジョルノ(こんにちは)。クレモナの町はどこですか?」

老人「ボン・ジョルノ・シィニョリーナ。塩通りをまっすぐ歩いて、右に曲がりなさい。すぐクレモナに出ます。まっすぐゆきなさい。ほら、あそこに大きな塔、ドオウモが見えるでしょう? 鐘(カンパーナ)の音がきこえている」

遠くに塔が見える。塔を指差すA子とその老人。

A子「ドオウモ。カンパーナ。あの町か……」
茶色の、中世の色をしたクレモナの町が見える。
SE　塔の鐘の音が急に近づく。
飛びたつ鳩の羽音。

6　塔（ドオウモ）

A子「ドオウモだ。鐘の音だ!!」
SE　ドオウモの鐘が鳴っている。
A子を吸い込むように鳴る鐘の音。
A子は、塔の下に走る。見上げる。
A子「これか……ヨーロッパでいちばん高いドオウモは……」
塔の先端。舞う鳩の群。クレモナの真中。塔と広場とA子。

7　ポー川の霧

クレモナの塔の下。A子は黒い服の神父と出会う。A子は身ぶり手ぶりで、塔の鐘をつくかっこうをして神父に話す。黒い服の神父はA子のふるさとにもいた。A子は心の鐘の音を、塔にのぼってたしかめてみたい。
A子「ポッソ・サリーレ?（中に入ってもいいですか?）鐘の音をききたいんです」
神父「……日曜日（ドメニカ）だけ開けるんですよ」
A子「ドメニカ?」
神父「でも、あなたのために開けましょう」
A子「グラッツィエ（ありがとうございます）」
A子は、塔の中に走る。
神父「階段に気をつけて、500段もあるんですよ」
石段を駆けあがるA子。
SE　鐘のひびき。
塔の中。窓。街並。街は霧に包まれている。
A子は、窓外を見る。
A子「霧だ。ポー川の霧だ……」
A子は、石段を駆けあがり、塔の上に出る。
M　クライスラー「美わしのロスマリン」、バイオリンソロの前奏。
A子の心と体の躍動を奏でる音節。
A子は、深呼吸をする。A子は塔の上で、舞う。円型の塔の回廊。ポー川は霧。
〝川の日記〟
A子「クレモーナ。霧が音を包む音。塔の下に、大時計がある。500年前の大時計。音をききたい」

8　アントニオのバイオリン工房

クレモナの町の路地裏。

A子はバイオリンケースをかかえて、路地裏を歩いてゆく。
ケースの中には、A子がこわしてしまったバイオリンが入っている。
A子は、街の人々に道をたずねる。果物屋さん。帽子屋さん。靴屋さん。A子は、人を探している。
〃川の日記〃
A子「アントニオのバイオリン工房をさがした。アントニオ。85歳のバイオリン工」
街角。パン屋さんの主人が、大きな身ぶりで道を指差す。
主人「ここを右へ、あそこを右へ、右へ右へと曲がりなさい。角から二軒目の右がアントニオのバイオリン工房です」
A子は、深々とおじぎをする。
主人もつられておじぎをする。
A子「グラッツィエ（どうもありがとう）」
主人「グラッツィエ・レイ（ありがとうございました）」

9 ルーカ少年

鳥打帽をかぶった少年が、A子と歩いている。少年は、前方を指差す。A子と少年は路地を横切る。道案内する少年。少年の名はルーカ。

〃川の日記〃
A子「ルーカと会った。十歳の少年。妹とひとつちがい」
A子「グラッツィエ・ルーカ（ルーカ、ありがとう）」
ルーカは、無言で路地を走り去る。
路地を渡るA子。
アントニオの工房が見える。
玄関のドア。ドアの上のノッカー。
ノッカーは人間の手の形。
A子は、背のびして、ノッカーを叩く。
SE　石の建物にひびくノッカーの音。
〃川の日記〃
A子「アントニオはいなかった。弟子の石井さんにみてもらった。日本人のバイオリン工」
ドアが開けられる。

10 バイオリンの物語

A子は、アントニオの弟子に案内されて工房の中に入る。アントニオはいない。
裸電球の光。工房の中の壁には、作りかけのバイオリンや、古い工具が見られる。吊り下げられてある。
A子は工房の中に入る。
SE　木造の床の上を歩いて工房の中に入るA子の

足音。使われていない家の独得の床のきしみ。
工房の中は、壁を除いて、全て木でできている。
工房の窓際に、バイオリンを作る木の机がある。机は、角がすりへっている。
窓ガラスはほこりをかぶっている。
裸電球の光と、窓ガラスからさしこむ自然光が、机の一角を明るくしている。
A子は、床の上にバイオリンケースを置き、注意深くふたを開ける。
SE　ケースのふたを開ける金属音が木の床に共鳴する。
A子は、バイオリンケースの中から、バイオリンを取り出す。
古いバイオリン。こげ茶色に光るニス。
アントニオの弟子は、無言でバイオリンを試し弾きする。
SE　バイオリンの音。
A子は、ため息をする。アントニオの弟子は、無言で、バイオリンを解体する。fの字の中から、魂柱（こんちゅう）を取り出す。音の柱。A子は、その動きを無言で見ている。バイオリンを解体する手の動き。A子は、その手の動きを見ている。バイオリンのfとfの間に、ひびが見える。
SE　バイオリンを叩く音。こじ開ける音。
表のふたが開けられる。バイオリンの内部。中には鉛筆で、1874年クレモナという文字がかすかに見える。作った人の名は見当らない。バイオリンの中から、あらわれる無数のレーベル。ストラディヴァーリと印刷されてある。
A子の持って来たバイオリンは、ニセものだった。
M　バイオリンの曲奏。
ヴィヴァルディー「山羊飼いの長い眠りに」ゆっくりとはじまる。

11

A子の屋根裏部屋

A子は、テーブルで、妹へのてがみを書いている。
〃妹へのてがみ〃
A子「バイオリンはニセモノだったよ。でも、クレモナ製にまちがいなかった。100年前のバイオリンだったよ。だれがつくったんだろうね……。中から、ストラディヴァーリのレッテルがいっぱい出てきたよ、わざと入れることがあるんだって……。だまって東京を発ってごめんね。こわしたバイオリンのひび、どうしても直したかった。調律に行ったコンサートホール。ピアノの上に置いてあった、バイオリン。こわしてしまったんだ。〃さわるな〃と書いてあっ

たのに……。置き手紙、よんでくれたでしょう？
屋根ウラ部屋、みつけたよ。一泊、三百円、千リラ。
鐘の音、川の音をききながら、眠るのです。元気でね。A子」
A子の屋根裏部屋と裸電球。
A子は、換金したリラ札を光に透かしてみる。イタリア語で数える。
A子の部屋の壁にはチャップリンのポスターが貼られてある。
A子の枕もとのバイオリン。
A子は、眠っている。
夕陽と、ドオウモの影。
M　ヴィヴァルディー「山羊飼いの長い眠りに」終わる。

12

アントニオの物語
A子は、音をつくって生涯をおくったバイオリン工の老人と出会う。
アントニオ85歳。
A子は、バイオリンを手に持ったアントニオをスケッチする。
アントニオの幻影。アントニオは、鳥打帽をかぶっている。

〝川の日記〟
A子「アントニオに会った。85歳。元バイオリン工。アントニオは奥さんを亡くしたばかりだった。シィニョール・アントニオ。小さな酒場で働いていた」
酒場の地下蔵で、A子に語るアントニオ。
アントニオ「このバイオリンをごらんなさい。木の年輪を……」
A子「……」
アントニオ「私は死ぬが、バイオリンは決して死なない。300年、400年と生きつづける。音はのこり、木はのこり。人の命は永くはない」
A子はバイオリンの弓を差し出す。
アントニオは、首をふる。
アントニオ「今はもう、ダメだよ、手が動かない……」
A子「オ・カピート（わかりました）」
アントニオ「カピート？（わかるかい？）」
A子「シィ・カピート（わかります）」
ランプの光。
アントニオが働く酒場の地下蔵。

13

アントニオの物語（ビッジョの酒場）
A子は、アントニオとビッジョの酒場で働いている。
酒場の主人ビッジョがぶどう酒の栓を抜く。A子は、

コップにぶどう酒を入れて、はこぶ。アントニオが見ている。A子は、コップを落とす。こわれるコップ。アントニオが見ている。主人のビッジョが肩をすくめる。A子は、エプロンのポケットから小銭を出して、コインをカウンターの上に置く。

A子「すみません。弁償します」

店の主人ビッジョが大声をはりあげて、A子のポケットにコインを押しかえす。

主人「ノン、バガーレ!!（払うことない!!）だれも払ったことはない」

A子「……」

主人「これは、きみのもの。友だちだから、みんなと同じにする。これでいいね？　これでよし。これでおわり」

14 アントニオの物語（バードコール）

クレモナの路地裏に、夕陽が沈みかけている。

A子は、鳥寄せのバードコールを首からぶらさげ、両手で鳴らしている。窓々から、路地のA子を見る人々。

SE　A子が鳴らす小鳥の声。

〝川の日記〟

A子「アントニオから、小鳥の声を出すネジをもらった。バードコール。川で小鳥の声を集めたいな。アントニオが店を休むことになった。みんなでお別れ会をひらいた」

15 アントニオの物語（アントニオのお別れ会）

店の中。大勢の人々が集まっている。

A子を抱きあげる主人。唄う人々。サックスをふく人。バイオリンを弾く人。アコーディオンをひく人。テーブルをたたく人。カウンターに立ちあがって唄う主人。よろこぶA子。アントニオは人々の唄を聞いている。

M　人々の唄う「黄金の心よ」――陽は沈み時は去り、それでも夜の木々は唄う。きみが唄った黄金の心を……。

人々は去り、店の中は静かになっている。

店のカウンターの中。アントニオがA子の手をとる。握手をする。

アントニオ「ボナ・ノッテ（おやすみなさい）。ソニ・ドーロ・エイコ!!（黄金の夢を!!）」

A子「ソニ・ドーロ・アントニオ」

アントニオは、中年の女性に手をとられて立ち去ってゆく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com